

# 荒川区出身の有名作家の書斎を拝見

# 吉村昭の息づかいを感じよう

「吉村昭記念文学館」では、吉村さんの人生をパネルや自筆原稿など、さまざまな資料とともに紹介しています。中でも目を引くのが、晩年の書斎を再現したコーナー。作家気分になって、足を踏み入れてみましょう。

### 吉村さんにとっての書斎

新築した家の庭に建てた書斎は、吉村さんにとって創作の場であり、安らぎの場所でもありました。一日のほとんどを書斎での執筆に費やし、作品に魂を込めていました。

### 本棚

郷土史の資料、地図、記事のスクラップなど吉村さん所有の資料がズラリ。

### 日記

「当用日記」という日記帳を愛用。その日の出来事や天候を記載。

### 万年筆

パーカー製などを愛用。原稿用、下書き用、手紙用など使い分けていました。

### 取材ノート

たくさん積まれた取材ノート。多くの人に会い、聞いた話を細かく記録。

たくさんの資料を見てこんなに努力が続けられる人なんだ！と感じました

神田 陽斗さん

## 吉村昭ってこんな人!



### 荒川区で少年時代を過ごす

現在の東日暮里に生まれ、第四日暮里尋常小学校(現在のひぐらし小学校)へ入学。18歳まで荒川区で過ごしました。

### 全国を旅して小説を書いた

自分で事実を確かめることを大切にして、各地に足を運びました。丁寧な取材と調査から描かれる作品が高く評価され、史実を忠実に表現した作品が多いことも特徴です。

### 病氣や戦争に負けず執筆を続ける

子どものころから大病に悩まされ、戦争で自宅や家族を失いながらも、命の大切さを見つめて作品の執筆に生かしました。

### 夫婦ともに作家として活躍

妻の津村節子さんは、芥川賞など、多くの文学賞を受賞している作家です。夫婦で励まし合いながら、ともに作品を世に送り続けました。



矢田部 在さん

身近なところにいた方だと知って自由研究のテーマにしてみました

### 写真立て

椅子に座ると、夫婦で仲良く並ぶ写真が目に入ります。

### 辞書

毎日使う辞書は欠かせない相棒。小説を書く時は、何度も辞書をひき、正しい言葉の使い方を確認しました。

### 椅子

取材を終えたあとは書斎の椅子に座る時間を楽しみにしていたそうです。

### 金庫

完成した原稿用紙と、火事に備えコップ一杯の水を入れていました。

### 原稿用紙

妻の津村節子さんとともに、浅草の「満寿屋」の原稿用紙を愛用。

## まだまだあります 吉村昭記念文学館

関係者のインタビュー映像など、館内限定映像が楽しめる映像コーナーのほか、著作を手にとって読めるコーナーも。

展示室で紹介された著作がズラリ。気になった作品を読んでみては



津村節子さんや作品の関係者の貴重な証言を聞くことができます



いつかはみんなに読んでほしい

## 吉村昭作品のおすすめ



荒川区が舞台の歴史小説! 医者で蘭学者の前野良沢と杉田玄白は、オランダ語の解剖書を翻訳し『解体新書』を出版。二人の対照的な人生を描きました。

昭和51年 / 新潮文庫刊



昭和13年(1938)から、4年をかけて造られた戦艦「武蔵」。その建造計画から沈没までを描き、戦争とは何かを問う作品。吉村さんのベストセラー小説。

昭和46年 / 新潮文庫刊



福井の町医者、笠原良策が主人公。良策は、天然痘(伝染病)から人々を救うため、命がけで、江戸時代に種痘(予防接種)を広めました。

昭和63年 / 新潮文庫刊



吉村さんが、ふるさとの日暮里で過ごした思い出を生き生きと描いたエッセイ集。昭和初めの暮らしや、町並みを知ることができます。

平成元年 / 文春文庫刊



大正4年(1915)、北海道で、巨大なヒグマが次々と村人を襲った事件を基に、自然と人間の関わりを描きました。ハラハラ、ドキドキの展開!

昭和57年 / 新潮文庫刊

### 吉村昭記念文学館からのお知らせ



## 桜田門外ノ変 企画展

12月18日(水)まで開催  
休館日●11月21日(木)、12月6日(金)  
会場●ゆいの森荒川3階企画展示室

吉村さんが連載をした「桜田門外ノ変」に関する資料や自筆原稿などを紹介しています。みんなも幕末の世界を味わってみよう!



## 作家・吉村昭 Q&A

- Q1 吉村昭・津村節子夫妻は二人とも文学賞を受賞しています。
- Q2 吉村昭さんが一番多く取材に訪れたのは、「戦艦武蔵」のテーマとなった長崎県です。
- Q3 取材では、カセットテープに証言者の話を録音することもありました。

答えは4面にあります